



# ガリラヤ通信

令和7年3月27日  
2025年第24号  
発行：ガリラヤ  
運営委員会

## マラウイと学校給食支援の力 Charity Begins at Home

NPO法人聖母  
山田真人氏



山田真人氏

1月25日の土曜講座では、アフリカ南東部に位置するマラウイの学校給食を支援しているNPO法人聖母の山田真人理事長が講演し、支援の意義、支援ネットワーク構築、教会的価値について話した。



コーヒーを飲むと子供たちの給食になる

山田さんは「Charity Begins at Home」を講演のタイトルにした。山田さんが入社した会社は英国の携帯電話通信会社のMOB ELL（モベル）社で、山田さんは「Not Only Travel the World but Change the World（世界を旅するだけでなく、世界を変えよう）」という同社のモットーにひかれて入社した。そして、モベル社の創業者であるトニー・スミス氏と出会ったこと、マラウイという国を知り、マラウイに召命を感じ、マラウイが自分の心が最も落ちつくホームになった。その結果、「世界を旅するだけでなく、世界を変えよう」が山田さん個人のミッション（目標）になった。

そのミッションを達成するために、山田さんはマラウイ産フェアトレードコーヒー「ウォーム ハーツ コーヒー」を母国日本で、カトリック系を中心とした学校（中学、高校、大学）や、諸団体に販売してもらい、協力企業の支援も受けながらマラウイの子供たちの給食支援活動を開始した。それ

は個人、組織、ビジネス、サービスをつなげていくことで成立する支援方法であり、その支援成果から社会貢献者表彰も受賞している。

山田さんは、つなげていく作業のヒントになったのは、大学で修めた神学と英文学だという。神学では旧約聖書に記しているさまざまな出来事と、新約聖書に記している出来事とのつながりを考察する「予型論」の学びが一番楽しかったし、文学では文脈と文脈のつながりを見るのがおもしろかった。そこで、このことが、組織をつなげて世界を広げることに役立つと話した。

この点と点をつないで世界を広げることを横軸とすれば、縦軸にはしっかりとしたミッションを据えることが大切であり、「お腹を減らしているすべての子どもに給食を届ける」という長期目標のもと、チャリティー文化の育成、飢餓の克服を目指す「が、NPO法人聖母のミッションになった。

2. 活動の背景

マラウイは貧しい国だが、とても幸せを感じる国であり、日本人の尺度にない「Kaibu（カリブ）」という分け合う、物事をシェアする文化がある。

そのマラウイで次世代を育てるためには、学校に来てもらうことが大切であり、山田さんは、そのきっかけになるのが学校給食だと考えた。マラウイの給食費は1食15円であり、年間200日の通学で計算すると、1人の生徒の年間の給食費は3000円である。

山田さんは、もう一つの重要な点として飢餓問題を挙げた。マラウイを含め、アフリカ諸国では飢餓が深刻な問題になっており、SDGsの17の目標にも、2番目に「飢餓をゼロに」が掲げられている。しかし、こうした長期的な問題に対する企業などの支援はなかなか広がらないのも事実だ。その点、何千年という歴史がある教会には、共に歩むというシンドスのな歩みによって社会と一致（統合）しながら、社会教説を書き替えて前に進んでいくことができる強みがある。

3. チャリティーの仕組み

いきなりマラウイの給食支援を依頼しても、受けてくれる人は少ない。そこで、マラウイ産のフェアトレードコーヒーを通じてマラウイのことを知ってもらうために立ち上げたのが、「ウォーム ハーツ コーヒー クラブ」だ。日本で支援コーヒーを販売する

には、生産したコーヒー豆を輸入して卸してくれる商社が必要になる。依頼先はコーヒー豆の輸入卸売商社・アタカ通商だった。話し合いの中で山田さんの活動を知った同社社長は、コーヒー豆の提供を即断したという。社長はコーヒー豆の調達には原産地の育成が不可欠であり、コーヒー農園で働く人々も豊かにしなければならぬと考えており、山田さんの活動がその思いに合致していることから、学校給食に代わるものとしてコーヒー豆を提供してくれた。

販売でこの活動に加わるのが、学校や企業等であり、特に日本の

未来を担う学生・生徒はこの活動を広めたという。販売を担う学生・生徒たちは、マーケティング、社会貢献、ボランティアに対する考えを深化させ、継続的に利益を出して寄付を増やしている。また、マラウイの人たちとの交流を通じてさらにモチベーションを高め、好循環を作り出す支援型のソーシャルビジネスも実施している。その例として、高円寺にある光塩女子学院の活動を紹介した。同校の生徒は、隣接する高円寺教会でコーヒーを販売し、世界宣教の日に宣教を兼ねてマラウイに行つて寄付を届けるプロジェクトを行った。

このように、コーヒー販売によるマラウイの給食支援事業には、アタカ通商やモベル社などからの支援と、多数の個人・団体による販売協力によって、コーヒー販売で得た金額はすべて寄付金にすることができている。

山田さんは「このように、通常はつながっていない点と点がつながることで線ができるが、この線が教会論という聖霊だと理解しており、その聖霊（線）がつながってできる空間に本當の教会が出来る」と述べている」と述べて講演を終了した。

額NPO法人聖母に届けるシステムになっているので、購入者が支払った金額は全てマラウイの学校給食支援にあてられる。

「ウォーム ハーツ コーヒー」は、マラウイで自然栽培した豆を焙煎したもので、柑橘系の酸味を感じる豊かな香りが鼻から抜けるスペシャルティコーヒーだ。



講座室の販売コーナー

### ガリラヤ、給食支援に参加

カトリック船橋学習センター・ガリラヤ（アンドレア・レンボ理事長は2月1日から、NPO法人聖母の活動に共感し、マラウイ産フェアトレードコーヒー「ウォーム ハーツ コーヒー」の販売を開始した。コーヒーメーカーでいたれたコーヒーを販売するほか、コーヒー粉やドリッパックコーヒーも販売する。

価格は講座室で飲むコーヒーが1杯200円、ドリッパックコーヒーパック（5パックセット）が1000円、レギュラーコーヒー（粉100g）が1200円。

この販売はNPO法人聖母が行っているマラウイの学校給食支援に参加するもので、ウォーム ハーツ コーヒークラブから届いたコーヒーを販売し、販売代金は全

### 秋田・山形巡礼実施

ガリラヤは6月27日（金）〜29日（日）の2泊3日で、アンドレア・レンボ補佐司教が同行する秋田・山形巡礼を実施する。

27日は秋田空港到着後、専用バスで涙を流す聖母マリア像や入母屋重層造りの聖堂で有名な聖母奉仕会をはじめ、秋田の殉教地である草生津（くさすじ）刑場などを訪ねる。28日は横手カトリック教会や春光寺のマリア観音、かつてキリシタンが働いた院内銀山などを巡る。29日の最終日には鶴岡、

山形、米沢と巡り、山形教会ではキリシタン研究者から、1620年代に起きた米沢藩士の殉教など、キリシタン迫害について話を聞く。その後、北山原（ほくざんばら）殉教地で祈りを捧げ、米沢駅から新幹線で帰路につく。

申し込みはツアーの企画会社であるパウラプランニング社のホームページ（<https://paulaplan.com/tour/domestic/tohoku2025.html>）から。締め切りは4月11日。

### 訃報



石田靖夫（いしだ やすお）さん

船橋学習センター・ガリラヤの創設メンバーの一人として長く講座部会長を務め、退任後は常任講師として福音講座を担当した石田靖夫さんが、2月8日に死去した。石田さんは好学の上で、熱心にキリスト教を学び、その教えを平易な言葉で後輩たちに伝えた。花の栽培を趣味とし、歌唱やピアノの練習にも熱心に取り組み、その真摯な姿勢から、同年代から若者たちまで多くの人に慕われた。

塩澤潔（しおさわ いさお）さん



船橋学習センター・ガリラヤの創設メンバーの一人

で、海外で長く観光や教育関係の仕事に携わった経験から、ガリラヤの方向性や運営組織の構築に主導的な役割を果たした塩澤潔さんが、3月5日に死去した。

素敵な笑顔で誰とも親しく接する、心も身体（からだ）もスマートな人で、塩澤さんの周りは笑顔が絶えなかった。2016年には、ガリラヤが主催した「アンドレア神父（当時）」と行くイタリア巡礼で、巡礼団の団長を務めた。

【おとわり】2月1日の土曜講座では、カトリック新潟教区の成井大介司教に、「見よ、それはきわめてよかったかった一総合的（インテグラル）なエコロジーへの招き」を読むというタイトルでお話いただきました。本号で講座内容をお伝えする予定でしたが、編集の都合で次号に掲載いたします。

# 東京新聞はなぜ、空気を読まないのか

## 開講講座に菅沼堅吾氏

ガリラヤは5月10日、船橋市の石井食品「コミュニティーハウス・ウイリアン」で新学期の開講講座を開催し、講師に東京新聞元編集局長の菅沼堅吾氏を招く。菅沼氏には「東京新聞はなぜ、空気を読まないのか」のタイトルで講演していただく。



菅沼堅吾氏

菅沼氏はこのほど、演題と同じタイトルの著書『東京新聞はなぜ、空気を読まないのか』を上梓した。その本の帯紙には「新しい戦前の中 権力を監視する」というキャッチコピーと、同社記者の望月衣子氏の「記者は言つべき言葉を、紡ぎ続けなければならぬ」という言葉を記している。新聞協会の新聞倫理綱領の前文

には、「国民の知る権利は民主主義社会をささえる普遍の原理であり、この権利は言論・表現の自由のもと、高い倫理意識を備え、あらゆる権力から独立したメディアが存在して始めて保証される。新聞はその最もふさわしい担い手であり続けたい」とある。ジャーナリズムにはこうした崇高な使命があるが、現代社会はおびただしい量の情報がSNSなどを通じて発信され、真実ではない

情報も拡散されている。また、権力を監視するという使命を忘れ、権力におもねるいわゆる「提灯記事」を見かけることもある。東京新聞編集局長として、付度しない紙面づくりを主導した菅沼氏が、どのような話をしてくれるのか、とても楽しみな開講講座だ。『東京新聞はなぜ、空気を読まないのか』を既に読んだ人も、あるいは、これから読む人も参考になる講演になるだろう。ご期待。\*受講者数に制限があるため、聴講希望者は必ず講座参加の予約をして下さい。

# ピックアップ<ガリラヤ講座>

## 大原神父、北原怜子さんを語る



大原猛神父

にきたのは昨年4月のガリラヤ10周年イベント以来であり、対面での講座はさらに遡ることから、聴講者は大きな喜びをもって大原神父を迎えた。

本号の「ピックアップ ガリラヤ講座」では、1月18日(土)に船橋市の石井食品「コミュニティーハウス・ウイリアン」で開催した、ガリラヤ創設者の大原猛神父による講座「蟻の町と一粒の涙」を取り上げる。大原神父が船橋市

大原神父は「蟻の町」ことや、北原怜子さん、松居桃楼(とおる)さんのことを説明し、自らに関わるエピソードや思いを語った。まずは、講話で話された蟻の町の概要から紹介する。

「第二次世界大戦で東京の下町が脚本家の松居桃楼で、松居は蟻

の町に住み込み、小澤の相談相手となって仕切りの運営を担った。戦争で家も仕事も無くした人々には、生きるために廃品回収(バタ屋と言われた)をして暮らす人が大勢いた。隅田川のほとり、言問橋の近くには、地元の顔役であった小澤求(もとむ)が行うバタ屋の仕切り場があり、この仕切り場が、バタ屋たちが共同生活をする「蟻の町」となった。

「第二次世界大戦で東京の下町が脚本家の松居桃楼で、松居は蟻

再度の呼び出しを受けて松居が都庁に赴くと、都は1500万円5年分割という蟻の会の要望を全面的に受け入れる回答を示した。この時、都の担当責任者の机上には、怜子の著書『アリの町のこと』が置いてあった。怜子はこの朗報が届いた3日後に帰天した。

新たな蟻に町の作業場は近代的な設備が整った施設となり、福利施設も充実したものとなった。蟻の教会も枝川教会として建てられ、東京教区の小教区として認められた。その後、高度経済成長の中で、蟻の町の住人は別の仕事へ移っていき、蟻に町はその役割を終えた。

大原神父は本所教会に所属する信者だったので、隣の浅草教会に北原怜子さんがいたことは知っていたし、裕福な家庭のお嬢さんが蟻の町で奉仕していることにも関心があった。そこで、神学校に進んだ時、友人と2人で松居桃楼を訪ね、蟻の町の体験をしたいと頼んだそうだ。松居が「何故、体験したいのか」と聞いてきたので、

「貧しい人を知ることが教会の務めであると考えたからだ」と伝えた。すると松居は「そういう上から目線で見ると、カトリックは嫌いだ」とすげえ勢いで怒鳴り、「そんなこと言つたら、神父になる必要はない。すぐに進学校もやめてしまえ」と言った。

「松居桃楼という人は脚本家だけあって、蟻の町のために北原さんをつまぐ利用したのだと思う。北原さんもうどん弱っていき、2代目蟻の町のマリアもできて、居場所がなくなっていた」と大原神父。

大原神父は「蟻の町を知り、蟻の町を体験したことは、その後、長く司祭人生にとってとても大きなことだった」と述べてマイクを置いた。

「貧しい人を知ることが教会の務めであるが、そこに向かう道が異なっている。司祭は教会に仕えることで聖性に向かい、修道者はキリストに倣って生きる3つの誓願(清貧、貞潔、従順)でそこに進み、信徒はキリスト者として生きることで聖なるものを目指す」と述べ、「召命とは、神さまからの呼びかけである。私たちに、その呼びかけに応えない自由もあ

松居の怒りで一旦は神学校をやめようと思ったのだが、蟻の町が8号埋立地の新蟻の町に移ったあと、松居から蟻の町体験を許されたことで、3日間にわたりバタ籠をかき回して潮見から門前仲町、茅場町まで巡ってごみを集めてまわる体験をしそだた。

大原神父は「正しいとか間違っていないとかではなく、ありのままの思いや気持ちを分かち合う」というカトリックの分かち合いだからだろ。

り、応えなかったことを非難されることもないが、その呼びかけに応えなければ、大切な恵みを受けとることは出来ない」と話した。新講座のタイトルは「心の畑を耕すキリスト者の召命をいきるために」で、福音書のはなしとお祈りで、私たちの心を耕す講座になる。皆さまの参加をお待ちします。

友人・知人は信じてくれないが、自分は子どもの頃から「照れ屋」で、ビジネスで鍛えられたとはいえ、高齢者の範疇に入った今も、できればこうした発表は避けたいと思っていた。しかし、この講座では緊張せずに発表することができる。的外れな感想を述べているかもしれないが、特に気にならない。「正しいとか間違っていないとかではなく、ありのままの思いや気持ちを分かち合う」というカトリックの分かち合いだからだろ。

5月7月期の講座は5月17日に行われる。この日は初の試みとして、1月-3月期に取り上げた詩編などから、自分の好きな言葉を書き絵で表現して、それを示しながら分かち合いをする。いよいよ、へたな文字をさらすことになるが、気にせずに参加しようと思っ。皆さんも気軽に参加して下さい。(ガリラヤ事務局・成富健)

## 新講座スタート Sr.岸里実の福音講座



Sr. 岸里実さん

5月7月講座から、常任講師による新講座(シリーズ)がスタートする。聖心(みこころ)のウ

長年のSr.岸里実さんによる講座で、土曜日の10時半-12時に行う。5月7月期は、5月31日、6月14日、7月12日に行う。

Sr.岸は昨年10月26日の土曜講座で、キリスト者の召命について話しをした。その講話では「キリスト者には司祭、信徒、修道者と立場が違う人がいるが、与えられる恵みや召命は同じだ。ただし、その目指す聖性(聖なるもの)は同

解説のあと、参加者は詩編を繰

## 詩編講座に参加して

伊藤真由美さんがナビゲーターを務め、アンドレア司教が詩編の解説をする連続講座「詩編の味わいと祈り」書いて歌って祈る」に、用事がない限り参加するようになっている。2月22日に行った講座では、詩編138番「神への賛美と感謝」を取り上げた。

講座の導入は伊藤さんの挨拶から始まる。この日は舊門十哲の一人である服部風雪の句「梅一凛一凛ほどの温かさ」を引き、これから梅の花が一輪咲くことに温かくなっているのだろ」といって、気候にマッチした話が語られた。

挙手した参加者が詩編138番を朗読し、その後、アンドレア司教が解説した。「この詩編はダビデの神に対する深い思想と神の偉大さが詠われている。ダビデの時代にはエルサレムに神殿はなかったが、ダビデは幻の神殿に向かってひれ伏し感謝を捧げている。偉大な神は弱い者を顧みて、高ぶる者は遠ざける。敵に攻められ苦しみにある時も救ってくれ、自分の願いを成し遂げてくれると詠われたっており、神の愛とその偉大さを表現している」。

解説のあと、参加者は詩編を繰